農人伝

女性が活躍するサボテン専作経営

野末 信子 ⑥

静岡・浜松市

「野末サボテン」の看板を掲げた5年後の1994年（平成6）、「静岡県農山漁村ときめき女性」に認定され、静岡市で開催された「マウント富士アグリフォーラム」に参加しました。

地元の女性にも機会を

今村奈良臣先生と嘉田良平先生の講演を聴き、夜は喧々諤々の夜なべ談義。とても刺激的で、学習したり他の女性農業者と情報交換することが、自分の家の農業経営を俯瞰するためにも重要だと痛感しました。

89年頃、地植えで始めたサボテン

アグリフォーラム開催に奔走

義母の言葉がずっと心の支えに

そのとき思ったんです。たまたま私は「静岡県農山漁村ときめき女性」に認定されたから機会を得たけれど、地元に残っている女性たちにはその機会がない。同じようなフォーラムを地元でやりたいと。

県の西部農林事務所の部長に掛け合うと、「ここに65万円あるから、これでやってみろ」と言ってくれました。

そこからはもう、一直線(笑)。行政やJAにお願いして開催への協力をいただき、言い出しっぺだからと実行委員長になり、生活改善グループ、農業経営士の皆さんを巻き込み、どんなフォーラムにするか、夜中まで企画を練りました。

西部農林事務所が主催の形で「アグリフォーラム」の開催にこぎつけ、約300人が集まったときは、本当にうれしかった。とにかく農業の現場を元気にしたい一心で、その後、10回まで実行委員を務めました。

今思えば、あのフォーラム開催が、地域農業に関するさまざまな活動に首を突っ込むことになったきっかけですね。また、行政主催の経営に関する勉強会や海外視察にも行かせてもらい、視野が広がりました。

後ろ髪引かれる思い

ただ、主婦としては、私が家をあけると農作業も家事も大変なのがわかっているわけですよ。いつも後ろ髪を引かれる思いで家を出る。ものすごい葛藤がありました。さすがの夫も、不満をいろいろ口にしました。

そんな私を見ていた義母が、こう言ってくれたんです。

「信子さん、遠くに明かりが見えるでしょ。頑張ってごらん」

その言葉は、ずっと私の心の支えになりました。当時は夫以上に私の理解者でした。

義母は、10代の頃に豊橋市の製糸工場で働き家に仕送りをしていた苦労人。豊橋市の都市文化にも触れていたし、同世代の農村の女性とは少し感性がちがっていたのかもしれません。

96歳で天寿を全うしましたが、今も本当に感謝しています。

構成　榊田みどり